

第六章 明治時代

(章・節) (題 目) (執筆者氏名) (備考)

はしがき 武田惠喜光 町 長

第一章 時代概説 甲斐不二男 元鹿児島市教育長

第二章 先史時代 河口 貞徳 県考古学会長

第三章 古 代 中村 明蔵 鹿女子短大助教授

第四章 中 世 永吉 毅 元町中央公民館長

第五章 近世(大和世)

第一節 島津氏の琉球入り 永吉 毅 元町中央公民館長

第二節 統治の基本 同右

第三節 代官所の機構 同右

第四節 沖永良部島代官系図 同右

第五節 「間切制度」から「方制度」へ 同右

第六節 糖業政策 甲 東哲 中学校教頭

第七節 交 通 喜坂三千春 町企画課長

第八節 教 育 玉起 寿芳 前町中央公民館長

第九節 西郷隆盛の流論 同右

第十節 藩政治下の諸事 永吉 毅 元町中央公民館長

第十一節 人 物 同右

第一節 諸制度の改革 伊勢 達一 元小学校長

第二節 沖永良部社倉の沿革 同右

第三節 行政区画と和泊村の発足 同右

第四節 正義会と同志会 同右

第五節 糖業事情 甲 東哲 中学校教頭

第六節 ゆり事情 喜井 利一 元町経済課長

第七節 水産業 喜坂三千春 町企画課長

第八節 工・鉱業 前田 義村 前町経済課長

第九節 商 業 有川 貞辰 元陸軍大尉

第十節 出稼ぎ 橋口 文雄 町役場主事

第十一節 交通・通信 喜坂三千春 町企画課長

第十二節 教 育 玉起 寿芳 前中央公民館長

第十三節 明治時代諸事 伊勢 達一 元小学校長

第七章 大正時代

第一節 議 会 中田 喜勲 消防組合総務課長

第二節 世界大戦と景気 伊勢 達一 元小学校長

第三節 糖業事情 甲 東哲 中学校教頭

第四節 ゆり事情 喜井 利一 元町経済課長

第五節 水産業 喜坂三千春 町企画課長

第六節 交通・通信 同右

第一節 戦死者名簿 同右

第二節 糖業事情 前田 義村 前町経済課長

第三節 ゆり事情 喜井 利一 元町経済課長

第四節 食糧事情 前田 義村 前町経済課長

第五節 交通・通信 喜坂三千春 町企画課長

第六節 教 育 東 一之 元小学校長

第七節 戦時下諸事 日置 ミネ (元中学校教諭) 元町中央公民館長

第八節 戦時下諸事 永吉 毅 元町中央公民館長

第九章 米国軍政時代

第一節 終 戦 伊勢 達一 元小学校長

第二節 行政分離 同右

第三節 軍 政 府 同右

第四節 議 会 中田 喜勲 消防組合総務課長

第五節 琉球銀行 宗 昇 町農協参事

第六節 L/C貿易と密航 同右

第七節 B円・低物価政策 同右

第八節 糖業事情 前田 義村 年町経済課長

第九節 ゆり事情 喜井 利一 元町経済課長

第十節 工・鉱業 前田 義村 前町経済課長

第十一節 食糧事情 山下堅四郎 研修センター総務課長

第十二節 衛生事情 宗 昇 町農協参事

第七節 教 育 玉起 寿芳 前中央公民館長

第八節 大正時代諸事 伊勢 達一 元小学校長

第八章 昭和初期

第一節 議 会 中田 喜勲 消防組合総務課長

第二節 天皇の行幸 伊勢 達一 元小学校長

第三節 産業組合 宗 昇 町農協参事

第四節 沖永良部電気公社 同右 町農協参事

第五節 和泊町の発足 伊勢 達一 元小学校長

第六節 糖業事情 甲 東哲 中学校教頭

第七節 ゆり事情 喜井 利一 元町経済課長

第八節 商 業 前田 精造 商店主

第九節 工・鉱業 前田 義村 前町経済課長

第十節 交通・通信 喜坂三千春 町企画課長

第十一節 治安・消防・防災 伊集院 健 町総務課長

第十二節 教 育 伊勢 達一 元小学校長

第十三節 昭 and 初期諸事 日置 ミネ (元中学校教諭) 元町中央公民館長

第十四節 昭和初期諸事 永吉 毅 元町中央公民館長

第十五節 太平洋戦争時代

第一節 議 会 中田 喜勲 消防組合総務課長

第二節 沖永良部駐屯部隊 有川 貞辰 元陸軍大尉

第三節 戦争災害 永吉 毅 元町中央公民館長

第一節 議 会 中田 喜勲 消防組合総務課長

第二節 天皇の行幸 伊勢 達一 元小学校長

第三節 産業組合 宗 昇 町農協参事

第四節 沖永良部電気公社 同右 町農協参事

第五節 和泊町の発足 伊勢 達一 元小学校長

第六節 糖業事情 甲 東哲 中学校教頭

第七節 ゆり事情 喜井 利一 元町経済課長

第八節 商 業 前田 精造 商店主

第九節 工・鉱業 前田 義村 前町経済課長

第十節 交通・通信 喜坂三千春 町企画課長

第十一節 治安・消防・防災 伊集院 健 町総務課長

第十二節 教 育 伊勢 達一 元小学校長

第十三節 昭和初期諸事 日置 ミネ (元中学校教諭) 元町中央公民館長

第十四節 昭和初期諸事 永吉 毅 元町中央公民館長

第十五節 太平洋戦争時代

第一節 議 会 中田 喜勲 消防組合総務課長

第二節 沖永良部駐屯部隊 有川 貞辰 元陸軍大尉

第三節 戦争災害 永吉 毅 元町中央公民館長

第十三節	交通・通信	喜坂三千春	町企画課長
第十四節	沖繩との関係	宗 昇	町農協参事
第十五節	教 育	和 住一郎	元中学校長
第十六節	復帰運動	花田 吉浦	元町助役
第十七節	分離中の諸事	伊勢 達一	元小学校長
第十一章	日本復帰後		
第一節	議 会	中田 喜勲	消防組合総務課長
第二節	教 育	大山 安弘	町中央公民館長
		日置 ミネ	元町婦人会長
	農業共同組合・農業共 済組合・農業開発組合	宗 昇	町農協参事
	復帰後の諸事・ (付)登記所沿革	伊勢 達一	元小学校長
第十三章	和泊町の発展	伊集院 健	町総務課長
	和泊町史年表	村栄 政美	町図書館主事
	執筆者一覧表	永吉 毅	元町中央公民館長
	あとがき	同右	

おわりに

和泊町は昭和五十五年五月に、町政施行四十周年を迎えた。これを機会に記念事業が企画され、いろいろな事業があげられたが、中でも町誌刊行ということが冒頭にとりあげられた。

このことは、真に当然というべきであろう。というのは、和泊町にはまだ町誌と銘打ったものがないからである。むしろ遅すぎた感さえしたくらいである。

しかし、町誌と銘打ったものはないが、それに代わるものとして、郷土先輩方の蘊蓄を傾けた貴重な研究の玉稿、尊い労作に基づく「沖永良部島郷土史資料」というA五判四百二十ページにのぼる、質量ともに重厚な書冊のあることはすでに周知のとおりである。これは、昭和三十一年に初版刊行され、昭和四十三年に明治百年記念事業の一環として改訂増補されたもので、郷土についての調査研究に不自由さは感じさせなかったものである。改めて町誌刊行となるにしても、この「郷土史資料」を主軸として稿を進めねばならないことは、だれしもが



和泊町誌編集委員

(枠内右から) 喜坂三千春
山下堅四郎 宗 利武
佐々木鉄雄 大山 安弘
伊集院 健 和 住一郎
前田 義村 東 一之
重信 初雄 橋口 文雄
花田 吉浦
有川 貞辰 (下段右から)
前田 精造 喜井 利一
宗 昇 甲 東哲
中田 喜勲 永吉 毅
永吉 敏人 甲斐不二男
竹 王寛
(上段右から) 日置 ミネ
伊勢 達一 玉起 寿芳
村山 英一 谷元 義男

認めるところであり、委員一同もそのように話し合ったが、それにしても、さらに追加せねばならぬものも相当予想された。であるとすると町誌を一冊だけに収録することは到底無理である。そこで話し合いの結果、思い切った民俗編と歴史編とに分けることにしたのである。

そのことが決まった後で、町誌編さんのための資料収集に県考古学会長河口貞徳先生の来島を仰ぎ現地を視察・調査中、昭和五十七年八月六日、和泊・知名両町境に近い久志検の中甫洞穴で爪型紋土器を発見し、沖永良部島に旧石器時代から、つまり一万年前から人類が住んでいたことが確認され、これで沖永良部島の先史文明は数千年もさかのぼることになったのである。

またその後、昭和五十九年六月に発見され十二月確認された、掩美島や伊藍島(沖永良部島の可能性が強い)等の木簡が出土して、沖永良部島の先史解明に新しい手がかりが見つかつた。

さい先よい、これら(爪型紋土器の発見、木簡の出土)のことどもに歓声をあげたのは、私どもばかりではあるまい。不明だった沖永良部島の先史が徐々にではあろうが究明されつつあるからである。

話は変わるが、沖永良部島の郷土史を調べていて頼りなさを感ずるもの一つは、なんといっても古い史料がないということである。それは、この島の文化度が、文献時代に達していなかった、否、達するのが遅かったというところかかわりがあるのではあるまいか。

たとえば、永良部世之主は応永二十三年（一四一六）に自殺したと推定されている。それなのに、宝永八年（一七一〇）藩命を受け與人平安山以下五名によつて、世之主の由来等を調査し藩庁に上書せし書類は、世之主死後二百九十四年後のことである。また世之主由来書は、嘉永三年（一八五〇）に平安統が「私先祖より代々申伝御座候」と述べているが、世之主死後四百三十四年後の記述である。この空間はこの島の文化度が文献時代に達していなかったことを物語るものであるといえる。

南島で鉄器を使い、文字を使用する、いわゆる文化段階に達したのが、沖繩では十三、四世紀、沖永良部島では十七世紀以後ではなからうか、との見方をする向きもあるが、史料がないとか、少ないとかいわれる原因はここらにあるのではなからうか。

それゆえに、執筆者は広く関係文献をあさり、資料を

収集し、それをもとに原稿を書き、検討しては書き直し、修正を経ながら内容の充実に努力したのであるが、学識経験共に乏しく、各委員それぞれ本務のかたわらの原稿執筆であるため無理な点が多く戸惑い、いたずらに日時のみを重ねる結果となつてしまった。

とは言いながら、執筆に当たっては各々誠意をもって鋭意努力してきたことは事実である。だが本誌全体を通じ原稿の推敲も十分でなく、内容・表現ともに不備不適などところ、補正しなければならぬところもあろうかと思う。本町誌が町民みなさんの郷土への理解を深め、あすへの町政発展の資となるならば、望外の喜びとするところである。

本誌編さんについて各方面の御協力と指導をいただいたが、特に終始でいねいに指導下さった甲斐不二男先生、先史解明に当たられた県考古学会長河口貞徳先生、古代史の解明について中村明蔵先生、郷土史について有川貞辰先生、それに町内有志の方々、終始激励を賜った町当局に厚く御礼を申し上げる所である。

昭和六十年五月六日

永吉 毅

和泊町誌（歴史編）

印刷 昭和六十年六月 一日

発行 昭和六十年六月二十日

編集者 和泊町誌編集委員会

鹿児島県大島郡和泊町教育委員会

（電話〇九九七九―②―〇〇〇九）

発行者 鹿児島県大島郡和泊町長武田恵喜光

発行所 鹿児島県大島郡和泊町教育委員会

振替口座 鹿児島④一六一九〇

印刷所 海上印刷株式会社

鹿児島市南榮三丁目一

制作有限公司 三立舎